

# Emergency Watch



## 神戸こども初期急病センター



2013年7月受診者数：2482人

### 訴え

1. 発熱	: 1572人 (1239人)
2. 咳	: 786人 (198人)
3. 鼻汁	: 554人 (10人)
4. 発疹	: 448人 (296人)
5. 嘔吐	: 444人 (128人)

(カッコ内は、その症状を主な訴えとして来院した患者数)

### 疾患頻度

1. 急性上気道炎・咽頭炎	: 984人
2. 感染性胃腸炎	: 284人
3. 手足口病	: 200人
4. 気管支喘息・喘息性気管支炎	: 184人
5. じんま疹	: 113人

## 今月のワンポイント！

7月の神戸こども初期急病センターへの受診患者さんの数は、6月に比べ430人ほど増加し2482人でした。疾患別頻度としては、上位2つが4~6月と同様で、急性上気道炎・咽頭炎が最も多く、次いで感染性胃腸炎でした。手足口病が流行している影響で3位に手足口病がはいっています。気管支喘息・喘息性気管支炎もまだまだ少なくありません。

今年は記録的な猛暑ですので、今回は熱中症についてのお話をします。熱中症とは「暑熱環境における身体適応の障害によって起こる状態の総称」のことであり、現在では重症度に応じてⅠ～Ⅲ度に分類されています。こどもでは汗腺が未発達、体表面積が大きい、水分の割合が大きいなどの理由でおとなより熱中症になりやすいといわれているため注意が必要です。

それでは重症度の応じた病態と症状をご説明いたします。Ⅰ度の熱中症は従来熱痙攣や熱失神といわれていた状態です。熱痙攣は発汗に伴って水分や体内のミネラル（電解質）が減少することで筋肉の疼痛性痙攣、いわゆるこむら返りが起こります。熱失神は長時間の暑熱環境への暴露や過度の運動などにより血管の収縮機能が低下し、血管内の血液量も軽度低下することで起立性低血圧、すなわち立ちくらみや失神が起こる状態です。どちらも怖い名前がついていますが熱中症の中でも比較的軽症でありこの段階で運動をしていたらやめて、身体を冷やし水分摂取を心がけることで対処が可能です。Ⅱ度の熱中症は従来熱疲労と呼ばれていたもので脱水および循環不全が進んだ状態です。時に医療機関の受診が必要で、冷却・安静のほかに循環不全を改善させるための点滴治療がなされる場合があります。Ⅲ度は熱射病であり、熱疲労がさらに進むことで臓器障害特に中枢神経障害が引き起こされたり、体温調節機能そのものが破綻して発汗が停止し高熱になったりする状態です。この場合の高熱は通常のウイルス・細菌感染症では経験しないような41度を超える高熱です。このような体温調節機能の破綻による高熱は循環障害による臓器障害をさらに悪化させるといわれています。こうなってしまうと集中治療があります。

熱中症は予防が最も大切です。予防の根幹をなすものは「暑さを回避すること」と「脱水を予防すること」です。我慢せずに積極的に涼むことや、こまめな水分摂取に心掛けてこの暑い夏を乗り切ってください。

